茶道筌蹄

五

460

茶道筌蹄巻之五

目録

茶碗
天目臺
茶杓
建水
食器
菓子器
煙草盆
同小道具
燈燭具

宗雨

1044

聚楽焼歴代
集雑

久志斤

釜置帛
美濃紙
一尺八寸ニ七寸五分
是を四ツ折ニして
用ゆ

茶道筌蹄巻之五

○茶碗之部

○天目類 建安縣天目山ニて焼し物故天目と云

曜変(ヨウヘン) 星のごとく紋有る也天目の中ニて曜変と云

玳皮盞(タイヒサン) 鼈甲(ベツカウ)の如き也出来ニて薄手なり梅龍の[illegible]
或ハ文字なども有り

油滴(ユウテキ) 茶湯の雫(シヅク)の様なる故ニ名づく

灰被(ハイカヅキ) アクなど懸たる様ニ見ゆる也

蓼冷汁(タデヒヤシル) 蓼汁を懸たる如くなるも有り

烏盞 色の黒き出来なり

禾 ノギ筋の立たる形なり

黄　茶溜りの端に黄色あり
建盞　建安(ケンアン)県(ケン)の盞といふ事なりいづれの手にも付ざるを建盞と名づく
瀬戸　瀬戸ハ是天目を写したる物なり

○青磁之類

雲鶴　青磁の中にても最も古し引木鞘柱云様と云物世に名高し
珠光　珠光所持二井伝来なり何れも色に似たりさうな物を云なり
人形手　人形なきとも人形手と云
饒州(ニヨウシウ)　茶碗の縁にサハリフクリンの入たるも有り東山殿
時代甚重宝しされ物なり天目に次ぐ

○染付之類

古染付　利休紹鴎の香炉を茶碗に用ひたるを始とす
其外雲堂　松竹梅　唐花何れも古染付なり
○虫喰
○祥瑞
○呉洲
○赤絵
○古赤絵
○金襴手
○宋胡録　ハチノ子と云ものなり

○安南

○紅毛

○井戸

井戸ハ高麗物の類をいふ井戸をことにおもんずる
を上品とし熊川を是に次見るを上品と次

小井戸　大井戸　小クハヒニウ　青井戸

名物手

井戸脇

真熊川

○熊川(コモガヘ)　朝鮮の地名なり

河澗道　是も朝鮮の地名 熊川中の上品なり　鬼熊川　後熊川

古三島

三島

礼賓手　此文字有り　彫三島　花三島

○刷毛目

古刷毛目

塚堀　土中より堀出したる物なり

朝鮮刷毛目

稲刷毛目　ふくらみて濃き刷毛目なり

粉吹　無地刷毛目に似たり

○高麗　紹鴎所持の茶碗在 此手名物多し

割高臺

絵高麗

堅手

本手

長崎　長崎某の所持箱に長崎と遠州公の書付あり
孤篷庵より雲州侯へ納まれ
雨漏
玉子手
鉢手
金海　朝鮮の地名なり
御所丸　織部所持なり箱に織部宗甫と書付あれハ
御所丸なりと云
○五器
紅葉
遊撃　遊撃将軍沈惟敬の筆洗なり此手代替遊撃と云

とも云本手なる雲州侯御所持なり
大徳寺
雛
番匠
尼
柿の蔕　高麗柿の蔕に似たり汁ゝ屋に似たりの類
一段古し
斗々屋　堺斗々屋へ船来したる故なり
伊羅保　元伯総樂喰といへり道正庵所持
古イラボ　刷毛目イラボ　釘彫　黄イラボ
ソバ　井戸のソバとも云ことあり

判事(バンス) 船中印章を掌る人の役名也此人の持渡さるく
ハタツリ 御本判皃 モサン 人の名
御本 遠州時代日本より注文有りしもの
餌畚(エフゴ)

○和物類

○瀬戸
伯庵 伊勢津の医師曽谷伯庵所持有りし也人伯庵
と云従来御所蔵有り半月香合に飛茶
黄瀬戸 瀬戸黒 織部 織部黒

○唐津
奥高麗 高麗人来りて唐津にて焼し故高麗の方
より奥と云ところあり
瀬戸唐津 唐津の瀬戸に似たる故也

○萩 長門 高麗人来りて焼初ると云
松本 地名 茶の質(タチ)悪し
深川 茶の質(タチ)和(ヤハラ)かなり松本深川とも萩焼なり

○伊賀

○備前

○薩摩
右二和とも遠州時代より茶盌を焼始るなり

○仁清

○清水　古清水アリ

○楽焼　代々

○手造類

○天目臺之部

○唐物

尼ヶ崎臺　黒塗石付の内ニ業の字アリ尼ヶ崎の町家某所持なり

数臺　数七ヶ舶来ハ皆名物なり内朱外黒サハリ縁

輪華　縁の形菊ニ似たる故ニ云

青貝

堆朱

○和物類

千ノ字　利休所持唐物黒塗臺千の字アリ宗旦所持なり

朱地　利休形なり

溜塗　利休形なり

一閑　元伯好千の字乃写し

○楽長二郎七品の茶盞

東陽坊　大黒　小黒　此三品ハ黒なり

臨済　早舟　木守　検校　此四品ハ赤也

右七種の名物ハ宗易より長二郎ニ命じて造らしむ但し長二郎中華ニ入りて石薬を求め帰り造る處なり

○陶寶文七品　唐の陸羽建安にて是を求め宝文と云

建盞　曜変　灰被　油滴　黄盞

玳皮盞　烏盞

○茶杓之辨

象牙　元来唐物イモ茶杓なれど代写しにてあるあり

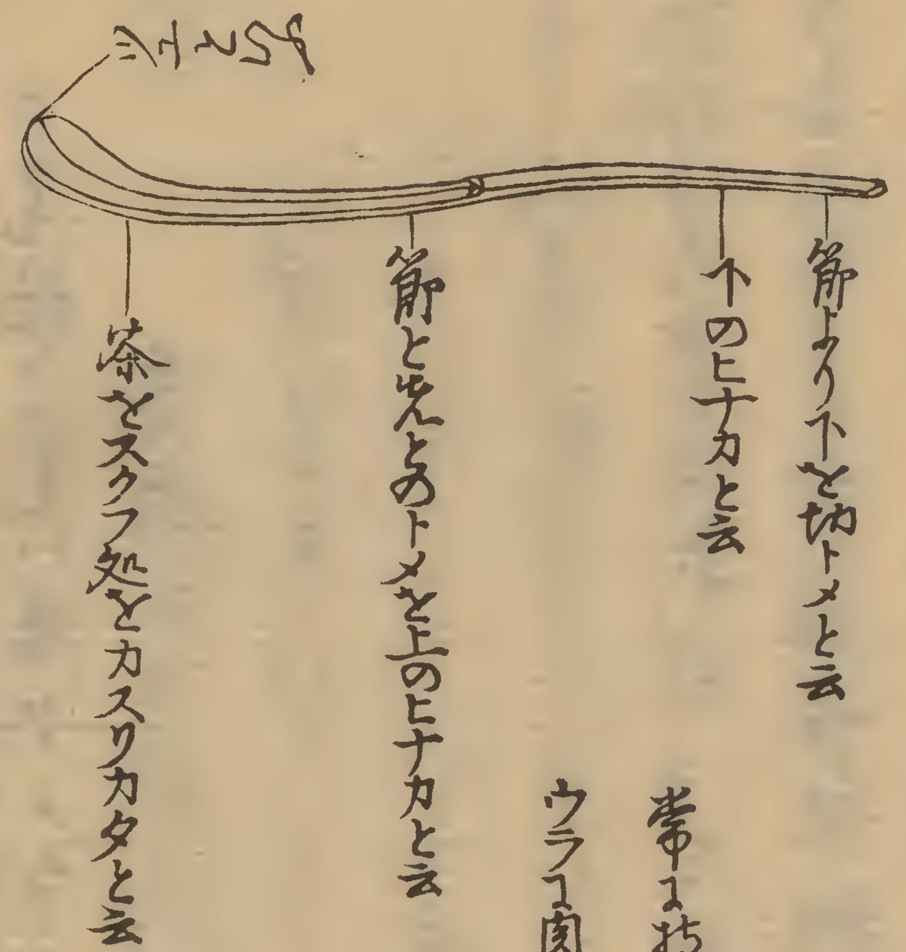
珠徳形　珠光門人南都窓徒なり珠徳形はイモ茶杓のイモをとりそれより其由人ヲツトリ太くしを短し大小あり今までは小の方を通し用也

利休形　大小　今までは小の方を通し用也

塗茶杓　いにしへ象牙浮ぐかゝりに坂侘人は鼈甲又は角を塗用也是塗は利休形溜塗は紹鴎一冊張は元伯之

茶杓　利休形は象牙と形同し南竹作は茶杓までも作の通に削るなり

節なし　竹茶杓のまへは削るなり珠光より始る珠徳宗栖羽洲宗幸此人三代作り何れも皆節なし○茶杓を削るは紹鴎はキリ留サカリ節を削る利休は中に節作る之



○元伯より上ハ湯タメなり元伯より後ハ火タメなり
　壺撒公の斉に
ゆかりある人にまへ勢て西の丹なり
ありけるすく形る件 致 仁に
いはれへ茶杓をヲリタメと云ふ事かあり 竹の節之
元伯よりの茶の判始りを如仁斎にはじめく茶判と云ふ
とありけるを東人辞嫁欲初る利休居に代写にて八
畳の目十二半老年にまで十三目の茶判りする程
なり利休居口の本斉ある山中氏に終るなり箇々
聚楽と云り
○建水　本字受汚

　○唐物金類
砂張　平コボシのはしめなり
紗羅　紗張のうちしなり
棒ノ先　古銘不分明く
合子　物をうち合るなり

骨吐　文字のごとし
鉢ノ子　則鉢の事なり
モウル金
　○古染付
雲堂　松竹梅　唐花
　○青磁

罋瓦ノ盞

〇南蛮物　メ切　内渋業

〇朝鮮

〇島物

〇籠抜

〇安南

〇同和物之類

〇瀬戸

大脇指　利休所持黄瀬戸之　紀州御所蔵

サミカヘ　利休所持捨貫なり　加州御所蔵

〇倫茶

〇信楽

〇伊賀

〇丹波

〇金物　うはし地

〇曲物　利休形之

〇食籠之部　付 菓子器

利休まではことぐ皆朱椀なり利休ゟ

黒椀と用也朱も兼用

黒塗丸椀　坪平付大小とも利休形

黒塗上り子　利休形坪并盞又内フタもあり平内

盞あり

黒塗碁笥椀　利休形汁飯椀とも碁笥底なり
坪平なし
黒塗一文字椀　坪平付大小とも利休形
朱丸椀　坪平付黒ツハメ利休形
吉野椀　坪付　利休形菊葉椀と云是よろしからず
菊の花なり飯椀なる又碁笥底坪なるを欤好之
或以茶会より子の坪平を用ゆ
面桶椀　利休形いづれもウルミ打蓋菓盛なり
坪平は丸椀とかわり用ゆ
輪廣椀　朱黒ツハメ江岑門人利休形の菓子椀のこ
此者人菓子の茶のこ出しし人なりしに一汁ある処

江岑と正午にゆかりありしに此菓子椀に飯汁添番
出されしを江岑感賞して坪と飯椀とを好む也又
汁椀を菓子椀とも称せし
精進椀　利休形香臺の内いづれも黒平内蓋楪子
底黒豆子　底黒引鉢　皆朱　但し茶会にも用ゆ乃ち
付飯器も用ゆ折敷朱角切にて黒組坪ハなし
烟絵椀　宗旦好紀州侯より加州侯へ進ぜられし時
の好なり朱に黒にて烟の絵なり坪内ワ　平内フタ
二の椀　汁椀より少し小さし　大平内フタ　吸物椀二の汁
椀より少し小さし　重箱二重　九食籠　食次手
なし　湯次　湯盃　彼アミ長角隅きり　酒次内絵　菓

子盃同形　二枚盃　盃臺同形 啐啄斎好　二枚足折敷

黒角切ころびの通りにて朱ツハメ

糸目椀　如心斎好溜塗なる一要半にて用ゆ外の席へも

兼用ゆ坪平ハ丸椀一文字椀の内を假用ゆ

○吸物椀之部

むかし形　黒丸椀の形にて木地落し

葎(ムグラ)　仙叟好朱。糸底黒ウルミにて原叟好

喰初椀　松竹鶴亀の絵にて利休形夕顔にて原叟好

夕顔椀　仙叟好ハタツリ夕顔の絵

烟ノ絵　小にて原叟好。喰初椀形ハすべて斎好

ハタツリ　原叟好ウルミにて煮物椀よりかり用ゆ

菓子椀　朱黒ツハメ利休形煮物椀よりかり用ゆ

○折敷之部

角ころび　元来利休形の湯盃なり後よ用ゆ形ハ丈に

仙叟より好み依て曲折敷と湯盃とよりちがひても

然るべし也

鐁目(カンナメ)　利休形溜角切カンナ目あり

曲　利休形溜角ころり

朱　利休形黒ツハメ角ころり

山折敷　元禄比よりして利休形なりカンナメ内に

桜皮のトヂメあり側深くして打合せなり

吉野折敷　根来比なり鏡に黒ハケメ側朱く裏に

嘉堂峰塚斎より吉野折敷と呼ぶ吉野椀よより
合は千家に本寄にあり
半月折敷　如心斎好一采ハ黒クルミ足糸目椀ニ
より行次
山寄盃　織部好溜塗鋤目裏黒腰丸
○食次
朱塗　黒塗　朱手付　黒手付　何れも利休形也
細の絵　原叟好手あし　杓子朱塗
○杓子
黒塗ハ黒の食次ニ用ひ朱ハ朱の食次ニ
用ゆ黒の手付ニハ形長さを用ゆ金ハ朱

の手付食次ニ添ふ也只色なり
○湯次
黒塗湯の子スクヒとも利休形なり又金乃
湯の子スクヒにあり金の湯次ニ添ふて用ゆ
朱ハ細の絵ある朱の湯の子スクヒなり
○門唐金
金杓子添ふ利休形元サハリ写ニて探家ニ
銅提とひて酒次なり
○酒次之分
利休形内黒外溜桧木地
塗
錫　利休形徳利なり

銚子鍋　いにしへ無火に燗をとる器なりしを織部より摩上に用也

同　丸　角　丸も角も利休形黒又り蓋

同　糸目　原叟好道爺作蓋ニ二通り有共蓋桐カラ艸

石翫子(チヨウロギ)ツマミニ茸座ニ漆付宗入黒石翫子撮(ツマミ)鉄埋

地ツマミ同様なり

同　平　啐啄斎好蓋手素銅

同　累坐　啐啄斎好黒又り蓋後ろく斎好ニ鉄フタ

を添出し

同　塗　利休形丸鍋(カンナベ)の通り鉄の上を黒塗ニ成

○盃之部

織部桃の蓋ニて酒を呑ましを利休より

して銘々盃を好む

銘々盃　利休形朱塗なり

萩の絵　原叟好大小二ツ重ね朱刷毛目ニ黒漆ニて

萩の橎絵

銚　原叟好朱二ツ重ね裏ニ黒漆ニて銚を書く

瓢石　原叟海部屋善次方ニて黒ニて瓢石を描かれ

し残今ニ写し朱る朱の一枚盃なり

○盃臺之部

黒　朱　利休形黒ハ盃ニ有乃系輪有り朱ハ無し

楽焼入盃洞　啐啄斎好

朱掻絵　前に同じ
〇八寸盆
杉の木地　利休形
桧の木地　仙叟好
掻入子 大小　原叟好
〇重箱
掻　利休形桐木地掻塗二重又同形まゝ黒塗にあり好
定ちなる次
掻　原叟好二重掻の絵の椀に漆
〇食籠
八角　九
元伯好一閑張二ヶとも内朱外黒八角八

鐶手あり
朱三重　一閑張琉球物写し外朱内黒鏡まで漆面
黄漆なり
掻　原叟好掻絵の椀に漆へ
青貝　唐物なり
堆朱　唐物なり
〇通盆
黒　利休形丸
一閑張　元伯好なり
杉の木地　利休形鏡へギ目
〇湯の盆

黒角ニても　利休形
淵　長角カシ十日皮卜ニ而蝋付黒仙叟好
一閑張　長角淵塗蝋付黒原叟好
黒丸　元伯好今千家ニ而用也　一書ニハ不用とあり

○菓子盆之部

縁高　黒ヌリ利休形○一閑張元伯好
ニるツキ　朱ヌリ利休形○朱ニて足なしの丸きハ原叟好○淵ニて原叟好しよりハ余程小ブリなるハ半庵宗也好なり
一閑張　菱ハ如心斎好角淵塗蝋付黒ハ原叟好
雑器　ナデ角黒如心斎好なり

○惣菓子盆

一閑四方　へギ目ある蝋元伯好へギ目なきハ宗全好
砂張盆　南蛮　朝鮮
三足盆　利休形朱蝋付黒
八角盆　朱塗黒ツハメ如心斎好元来ハ唐物写之
菓子の絵硯蓋　桐木地錫(スズ)縁菓子の絵花を胡粉紫ハ紺青なり宗全好
八角菓子の絵　桐木地金粉ニて菓子の絵錫へりなり了々斎好

○煙草盆之部

○塗物類

鐶手　如心斎好真黒塗

コリ蓋　縁溜塗底溜黒塗原叟好

糸巻　真黒塗糸巻スカシ瓜紅如心斎好

三ツ入　桐木地黒掻合元伯好

舟形　行李(コリ)蓋の塗ニ形なり真黒塗宗全好

○木地類

鐶手　棗の木地ニ付如心斎好

ツブ足　棗の木地なり如心斎好

半庵好　茶入長角棗ニも共木ニて唐子のスカシ

行李蓋　原叟好真塗の通りニて棗木地

覚々斎好　中次ニトマリ有りゲス板ニ火入灰吹切込ミ

下へ煙草入といふもあり棗の木地

糸巻　如心斎好ヌリの通りニて棗なり

○一閑張之分

木瓜　元伯好一閑張ニ付

釣瓶　元伯好大小有り今用ゆるハ大の方なり

行李蓋　原叟好真塗の通りニて一閑張なり

三ツ入　一閑張ニてうるミ元伯好なり竹の折ニ有るを宗全好なり

ツブ足　如心斎好一閑張

○同小道具類

○火入之分

元来ハ香炉をかり用ゆ

○青磁

○染付物

○赤物類

○金類

○国焼

一 楽焼之部

累坐 如心斎好焼タンパン又香炉茶も有り

三ッ足 啐啄斎好香炉茶あり

八卦 了々斎好善五郎作八卦金入

○煙草入

タトウ紙 古来より用ひ来れり

挽物 如心斎好 槐（エンジュ）木地

一閑ヲリタメ 宗全好あり

棗 如心斎好長角シヤツリ蓋内室へ好之出ればよし

楽焼 宗全好長角ヲトシ蓋上よりツマミ有り香炉茶

行李 蓋まくれ合は

椰子 如心斎好カキ合の二ッ入よ好む

○煙管

嵐屋形 唐より渡りさまざまの形状写は

筋 如心斎始て好む

○灰吹

書院 了々斎好嵐屋より太し

青竹　、茶会ニ用ゆ
白竹　常ニ用ゆ何れとも元伯好なり
黄黒ニ　○小火箸　元ハ金火箸を用ひしなり
真鍮
砂張
桑柄　千家ニてハ桑柄を用ひず
○燈燭器
短檠（タンケイ）　矢筈完　何れとも利休形矢筈ハ居士の内室宗恩の好なりとぞ二畳台目より上ニ用ゆ尤台目切ハ四畳半切なり楽の油盞火皿長焼なるハ短檠ニ限る

竹檠　利休形地板枚楽焼油盞二畳台目より上ニ用ゆ
○仙叟好ハ切明の所長しかるに利休形の通りなり
長嘯子の奇ニ
かゝれ日も世て呉竹外とをし火を
世々のこゝろ清さなる紙ぞかゝぐるとよ
木燈台　利休形塗手桐柱塗木台なる板二枚太鼓〔但し〕
油盞用ひてもよろしかるべし
筆燈台　宗全好塗手桐柱塗坐なる楽焼まて黄クスリ
筆の形なり
同　原叟好　坐アメ薬宗全好よりとらく筆の数あし
尤金入となり

結燈臺　加茂神前ニ有る形如心斎好なり用ゆ但し一
す巾の美濃帋をコヨリにして上より二寸ほど下
にて又是もマムスビ二本なる前に此る人火皿とさし込こ
油盞も上よりさし込む本なる何にても皮付を用ゆ
○但し四畳半を用ゆ

坐敷行燈　利休形松の木地竹の手火皿の上へ竹乃
輪を通し油盞を乗く暁の茶の湯よるなかすらば
此行燈を用ゆ

露地行燈　利休形桧木地春慶ヌリ覆又ハ黒ヌリ
火皿ニホウツキなる一枚の油盞を乗く風なき夜は
覆をとられたり

半月行燈　如心斎好大小有り大なるは八畳小なるは四畳席の
廣椽よりては此二品をはかゝらひ用ゆ

竹行燈　啐啄斎好大臺下手松のスリ漆手家まては
をべて紙のはる燈心二すじ

魚燈臺　元伯好竹油盞を用ゆ

円桐　利休形二枚去器水屋の場に用ゆ

手燭　利休形銅又ハ黒塗

小燈上長　青磁　瀬戸　樂焼　啐啄斎好香炉クスリ　小坐敷席中なる
小燈を用ひ廣間と庭中ハ手燭を用ゆ

金入小燈　了々斎好善五郎作

手燭臺　原叟好桂ケヤキ蝋手桐手タンハン金入

○同小道具

油盞　額縁霰地何れも利休形

去盆　於焼水差無焼臺何れも利休形。焼物ハ好みに好

大皿　額縁利休形。於焼碎啄好香炉某カキ色

まて四ケ目垣の種類

掻立（カキタテ）　黒モジを席中に掛を庭中に用ゆ何れも利休形

油次　利休形黒塗なり

木焼物　利休形菊隆子後二日月右四月左半月

石焼物　利休形其餘古きを賞翫す

八角焼物　利休形元来は　襟中に用ひられしを
かり用ゆ枚手書張八方に飾れり

金焼物　利休形と用ゆ鉄筆水の種類又利休形にて
燈クズレにて其餘古きを用ゆ

○楽焼歴代

元祖飴也　朝鮮人なり或説にアメヤとも朝鮮の地名
また大永の頃日本へ渡り後に弥吉と云長二郎が父
四代にわたり

尼焼　日本人法名貞林と云飴也の妻なり

初代長二郎　飴也の子なりといへり利休千氏に遣して
旧姓田中と長二郎へ送り是より今に田中と氏と次文
禄元年壬辰九月七日没は行年不詳

二代吉左衛門　長二郎の子なり豊太閤聚楽城造営

ありしに紀吉左衛門に命じて屋瓦を造らしむと云
其賞として天下一聚楽焼の号を賜ひ其上楽字
の金印を下さる此印一入まで傳来せしが宗入に
至り故ありて焼失し落髪して宗慶といふ其後に
常慶と改む寿百歳を保つ頂妙寺旦那寛永十一
年乙亥正月廿九日没す

三代ノンカウ　俗名吉左衛門実名ノンカウ法名道入
是より妙覚寺旦那に成る明暦二年丙申二月廿三日
没す 一説に明暦三年丁酉といへり未詳

四代一入　ノンカウの子なり俗名佐兵衛後吉左衛門と
改む法名一入元禄九年丙子正月廿二日没す

五代宗入　一入の嫡子なり俗名吉左衛門享保元年丙申
九月三日没す

六代左入　宗入の実子なり俗名吉左衛門延享四年丁卯
四月廿三日没す

七代長入　左入の実子なり俗名吉左衛門明和七年庚寅
九月五日没す

八代得入　長入の嫡子なり俗名吉左衛門病身故了入に
嫡子を譲り隠居して佐兵衛と改め二十歳にして
安永二年甲午十一月七日没す

九代了入　得入の嫡子なり俗名吉左衛門

十代吉左衛門　了入の実子なり

○一説ニ長二郎飴入長左衛門を養子にして吉左衛門と
いふ元祖飴也是とも遠ニやノンカウより此小法ニ住す
ノンカウの弟子道楽といふ所の俗名忠左衛門といふ放蕩
ものにて父兄の勘気を受て浪花或ハ左海などに家を
定めず住せしとぞ其用ゆる印の中に左文字あり又一入
の実子に弥兵衛後に一元といふ所の是も故ありて此職を
名乗らず其子弥兵衛一向といふ子世す其弟弥兵衛住玉
斎といふ弥兵衛の家ニ住土斎までを系より又宗味といふ所の
是ハ素人(シロウト)焼より 正保四年丁亥二月八日没す 其餘素人焼に光悦空中
乾山など何れも楽焼にて千家にて手造る江岑より
始まり其後諸家宗匠方にても手造出来す

○集雑

茶箱　桐ニ春慶大小とも利休形

草紙茶箱　大ハ利休形小ハ宗入好

一閑張茶箱　外溜内黒大小とも原叟好小の方ニ蜥

同[illegible]啐啄斎好

桐唐戸面茶箱　了々斎好

腰提　啐啄斎好溜スリ漆ケヤキ楽焼焼物袋入緩ニ

提げ竹の茶杓筒添

茶筅筒　竹にて底紫檀(タヽミ)を入て利休形より教の曲物

上のひら紐ありとも利休形より

茶巾筒　竹にて利休形。塗付類もよし

見臺　菓木地利休形なり
脇息　菓木を足に牡丹の彫物あり利休形
衣桁　利休形菓木を猪よ子じ梅の彫物あり子じ梅
　風炉先の濫觴なり
風炉先屏風　利休形白張黒塗縁なり子紙炉風
　呂とも通用
同　金張付　利休形の通りにて金箔紙を張たるなり
　如心斎好又紹鷗舟引の画にても如心斎好なり
同　長押　仙叟好白竹押へ桟縁利休形より二寸低し
同　棗捻梅　如心斎好なり
同　葭　如心斎好なり

同　乱桐　了々斎好なり
同　網代腰　了々斎好なり
六枚屏風　利休形白張黒塗縁○金砂子にて形なる
　了々斎好なり
同　葭　寸法利休形の通りにて葭なる原叟好
勝手二枚屏風　利休形白張黒ヌリ縁
同　葭　利休形なり
同　網代　如心斎好なり
屏風棧鴛鴦　唐金楽焼とも了々斎好
置刀架　利休形菓二ツ腰架なり腰板桟後に印籠架子
　の折釘二本上に茶筌の輪あり短刀を架る

同桐糸巻　原叟好なり
書棚　利休所持の写し遠棚地袋につり
香箱　桐ニて古き物を禅家ニ用ふ物なり在俗
　書などに入てもなり
掛物箪笥　桐ニて利休形　樅(モミ)ハ元伯好
文箱　焼桐利休形　緒萌黄四ツ打
同一閑張　啐啄斎好　緒茶の袋打サナダ
熨斗臺　塗朱地春慶如心斎好尤くしを足ニ十
　文字なり
○着用類
十徳　利休より古し絽紗(シロ)の類

八徳　原叟より子家ニ用也絽縮緬の類
手巾　緋ニ原叟　利休茶ニ啐啄斎。八徳着用
　の節ニ用也
頭巾　黒繻子モミ裏利休形
足袋　白　藤玉子　浅黄　紺ニ如心斎好啐啄斎好
　茶会の節炉風呂ともニ用也
扇　利休形ニ金粉雨龍の蒔絵内金外黒二重
同一閑　啐啄斎好小ニ張内黒外漏の一重なり
提鞘　利休形紐花色口ハ打小刀を爪切小刀ニ用也
　鞘ゴマ竹節留め紐付紫革
火打袋　利休形アヅキ皮紐利休茶小刀ハ提鞘同

揃箱る一枚入底

扇子　利休形十本立地紙銀スナゴ片面に胡粉を

筆片面は墨画の山水なり

○如心斎好は親ボ子津竹上に節有り白紙に布

目有るなり

香袋　千家随流斎より所持なり

手拭鈎　紫金地裏緋クサラカシ下に引出し有り

内に黄楊(ツゲ)の櫛一枚白紙のタトウ紙に包て古鏡袋

蒔絵の家に入る

桐火鉢　千家所持桐胴銅のヲトシ金泥にて

鳳凰の蒔絵有り通桐の桐火鉢より至て古し

好之知足斎

手焙(テアブリ)　利休形アミカウ善五郎作楽の瓢箪ハ宗

入写しなり

炭切敷　竹にて製し炉風呂二本有り維茶を

津るくなり

茶道筌蹄巻之五　大尾

此條目湛然先師所録余就默々齋業師請其註證明備師口授面命不遺瑣碎余從聽從記閲數月功畢矣遂淨寫以供同社諸子之清賞焉想夫茶味之與禅味本来一理水月鏡花無色無相然古人有執規矩而為方圓能棄規矩而為方圓也是故先哲既執則於後世矣學者倘出自斯範圍中而得悟入茶味之三昧所謂味外之味可知生乎其間也已

文化丙子之秋　浪華　略庵嚴識

弘化四丁未年　二月出板

三都書房

大阪心斎橋半丁南ヘ入　敦賀屋九兵衛
同　心斎橋通順慶町北ヘ入　柏原屋清右衛門
同　博労町角　河内屋茂兵衛
同　唐物町　河内屋太輔
同　江戸堀壹丁目　今津屋辰三郎
京　三条通御幸町角　吉野屋仁兵衛
江戸　日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　淺艸茅町壹丁目　須原屋伊八